

どんな幼稚園が

良い幼稚園でしょ、か

良い幼稚園での所見（下）

小川正通

小学校への基礎を築くこと

言語

子供が良い話言葉（語い）をもつていると、読むことを学び易い。そして彼は言葉と実物及び経験を同一化することによって、語いを構成していく。一体、刺激のない環境は、殆んど或は全く好奇心を起させないのである。直接、間接の多くの経験によつて、幼児の創作的表現が可能になるのである。即ちこれらの経験に由来し発達してくる語いは、一言葉と言葉が重なり、句と句が重なり、固い概念の基礎を形成する。

そしてこの基礎を欠く場合には、読方における成功は殆んど望み得ない。良い幼稚

園は、子供の後の学校生活の各重要部面となるレディネスに寄与することができる。

文庫に備えている面白い多くの絵本は、

お話をについての興味をそそつていて、しかも幼児向の良い絵本は、絵図を通して子供が話の筋を理解し得るように工夫されている。

また幼児が絵の下にある印刷文字によつて、話の筋が語られていることを知ると、次第にそのシンボルを読みたいとの興味をいだくようになる。かくてさし絵の連続は前から後へと読んでいかれるものであることを教える。園児は間もなく大好きなお話をのつている絵本を好むようになり、また本を大切に取り扱うようになる。

嘗ては、幼稚園において習字が教えられた。しかし四、五才児の発達と筋肉の働きについての知識が明らかになつて以来、習字に必要なこまかなる筋肉調整は、児童にとって希望すべきどころか、有害でさえあると考へられるに至つた。たとい児童が緊張しても、紙上に複雑なシンボルを書くこと自体が無理なことである。良い幼稚園では多くの肉体的活動と大筋肉使用とを誘う活動及びその設備を用意している。そしてこまかなる筋肉調整のためには、手技、製作の項で述べた種々の材料による経験が与えられる。

子供によつては、幼稚園で自分の名前を書くことのレディネスを示すであろう。しかしそれは書くことが決して要求されたのではなくて、児童自身のイニシアチーブでなされなければならない。子供に対しても、習字として手本を書いてやることは、一年生で初めてなされることである。大抵の学校では、一年生で印刷体を用いるのであるが、学校によつては筆記体を用いている。

著者の知るところによると、大文字のみ教える教師はいないようである。しかるに熱心な父母や祖父母が家庭で子供に教える

場合に、学校でもそうしているのだらうと考えて、屢々大文字で名前を書くことを教える。家庭と学校間の連絡を密にして、かような矛盾をさけなければならぬ。家庭では一つのモデル、幼稚園では別のモデルをして恐らく一年生では、また別のモデルから学ぶようであつては、子供の経験を混乱させるだけである。首尾一貫して、初めて学校へスムーズに適応することが可能であろう。

正しく発音発声された言葉を聞き、また教師が話すように言葉を話すことによつて子供は言葉と文字のひびきを理解するようになる。子供も自己の欲望と感情とを話し言葉を通して人に知らせる。しかし語りも豊富でないし、書くことそのことができないのであるから、情緒的反応（泣く、笑う、すねる等）と行為とで表現する場合が多いのである。

園児はお話をしたり、ニュースや自分が参加した事件を報告する経験をもつことが必要である。しかし子供によつては、質問に対し極めて短い返答しかしない。

(例) 教師の問「あなたは何処へ行きました

したか」 幼児の答「公園」 教師の問「あなたは何をしましたか」 幼児の答「ぶらんこで遊んだ」 教師の問「それからあなたはどうしましたか」 幼児の答「家へ帰つた」

彼が成熟し、自己の経験を話す機会にめぐまれると教師の助けを借りずに、短い連續的なお話をができるようになる。また從来の断片的な文章は完全な文章となり、話がその中心題目からはずれるようなことがなくなつていく。そのためお話を本の絵の連続が、非常に役に立つ。一般に、子供がお話をしたり、報告したりすることに関してもの発展能力やスピードは、各園児によって差異があるものである。

言語表現のもう一つの面は、人或はグループの面前で、話をなし得る能力であつてそれはばむ恐怖心やはずかしさは、次第に克服される。そして種々の経験をもつこと、それについて話すこと、教師が読んだり話したりすることを聞くこと、観察したこと等を理解することから出発するものである。

民族、宗教或は父親の職業がなんであるとも、彼のクラスの男女児全體に共通する或る要求があることを、彼は学ぶであろう。すべて人は、家庭（それがテントであろうが、大邸宅であろうが）、衣服（それが

綿であろうが綿布であろうが）及び食糧

くことによつて、言語的交渉は成立する。他人が話しているときに、注意深く聞くことは、上手に話すことと同様に重要なことである。しかし園児に対しては、一時長い時間聞くよう期待することはできない。それは彼の興味の持続時間が短いからである。彼は話すことと同じく聞くことと好む。したがつて、両者のバランスを考慮するがいい。

社会科

幼稚園でのすべての経験は結局、社会科に貢献する。即ち家庭経験、見学、展示、お話をしたり、報告したりすることに関してものの発展能力やスピードは、各園児によつて差異があるものである。児の家庭、学校及び地域社会に対する関心が一層高まつていく。彼はその身辺の生活訪問客等をドラマ化することによつて、幼

(それが豆であろうが上のヒレ肉であるうが)を必要とすることにはかわりがない。

家庭における家族の全成員の役割が強調される。また幼児達は、郵便配達夫、消防夫、警官、八百屋、給油所の係員等を友達として、親しさをおぼえるようになるし

労働者がなくては立派な道路ができないことを理解するようになる。さらにもし作物を収穫したり、トラック運転をする人の労働がないとするならば、市場に果物も野菜もないことを知るに至るであろう。

小学校の上級でやるような仕事の単元はもちろん幼稚園には不適当である。むしろそれは幼児の「興味の中心」の短いものでなければならぬ。

しかもそれはクラス中の少数を興味付ける範囲のものであつて差支ない。例えば一人の幼児が農場へ行つたことを話す、或はクラス全体が農場を訪問したとする。すると幼児は、農場の動物について語る。誰かが農場を造りたいという。しかしそれは興味のあるものだけでいいのであつて、決して、クラスの全幼児に対し、その「興味の中心」に活動すべきことを要求するものではない。幼児の注意の持続時間は、短いの

であるから、如何なる「興味の中心」も、二時間から二週間程度のものであろう。そ

してかよくな「興味の中心」が、一つ以上保育室の中で同時に進行することを決してさまたげるものではないのである。

社会的な態度及び社会から受け入れられるような行為が意識的発展するように導くことが幼稚園における社会科の重要な任務である。したがつて幼稚園では、グループの間の関係の改善に力が注がれる。というの子供は本来、生得的なひがみをもつていて、なければならない。年長児や大人との交渉をして、ひがみをもつてゐるからである。

数概念

多くの算数概念が、形式的でなく導入せらるべきである。経験の中に含まれるものには、計算、大小の比較、円・三角・立方体・正方形等の形の区別、少い・多い・多量・若干・少量の如き部分概念を学ぶこと

・中・下・上・時計の見方、カレンダーの見方、週と月、軽重の識別、次のようなお金の価値が分るようになること等である。即ち一セント・五セント・十セント・二十

五セント・ドル。

自然科学

四、五才児は、案外、自己の身辺の観察が鋭いものである。そして彼は屢々「如何にして」、「どうして」の質問を試みる。幼稚園こそ、その好奇心や興味を促進する優れた機会を提供することができる。即ち自然の中を歩くこと、簡単な実験、自然の展示、動物の飼育、花壇の世話、経験の発表等を通して、幼児は自分の環境についての大きい知識を取得する。また彼等は季節の循環、鳥の巣をつくる習性、風の進行路、雪のレースのような結晶美、雲の絵図等についても学ぶ。さらに暖かい太陽を感じ、雨のバラバラ降る音を聞き、ピンク色のさなごにさわり、さなぎから現れる蝶を見守り、スミレの良い香をかぐ。しかもこれらの経験は、仲間や興味を同じくする子供にも分配せられるので、一層意味があるのである。

肉体的要件の項で述べた健康的習慣の発達を通して、彼自身の肉体の構造と機能についての簡単な知識を獲得する。そして注意深く選ばれた活動とディスクッションと

は、知識の増大のために役に立つ。

社会的情緒的要素に応すること

人とうまく折合つていけないならば、どんな社会グループにおいても、その良い成員となることができまい。社会生活とは、民主主義の原理に基いて考へ且つ生きることを学ぶことである。またわれわれすべては、仕事の生活、家庭生活、及びリクリエーションにおいて直面する情況に対し、社会的に認められた態度で反応し得るようにならなければならない。

良い幼稚園では、個人として又グループとして、仕事をすることを身につける。「会話の時間」に協力作業と諸活動とのためのプランが立てられる。また家庭で玩具や持物をグループの間に分けた経験をもつたい子供達は、幼稚園で物品の交換について学ぶ。さらに物品使用の順位が規則によって定められる。最初は規則が教師によつて作られるが、子供が成熟し、規則の必要な理由を理解し得るようになると、規則作成の御手伝もできるようになつてくる。

級友や大人に対して、ていねいであることを学ぶこと、他人をいためつけぬよう注

意する事、グループの状況によつて自分を統制すること——これらすべては、幼稚園における幼児の社会的発達の重要な部分をなすものである。子供の指導力とイニシアティーブとが奨励され、また自分のアイデアを通して仕事をしていくよう導かれる。当面した問題のための活動を選択し、自分の計画に従つて、ものごとを運営する機会が沢山与えられ、選択が要求されるときには、いつでも可能な限り自分で選択できるようでなければならない。

また失敗と緊張との連続は、園児の望ましい発達に有害である。クラス中に適当な環境を用意することによって、恐怖、緊張及び情緒的な爆発を消失させる機会が与えられる。さらに魅力的な（刺激過剰ではないが）保育室、理解ある教師、幼児のグループ中の親愛と幸福のふんいき等は、学校が惹き起した緊張をば減少させるものである。音楽に自由に反応するリズム活動、子供が創作した歌、内面的思想を表現した製作、家庭及びお話を経験のドラマ化等は、いずれも緊張解放に役立つことができる。

安定感は問題解決による諸経験を通じて達成される。

れます。専任の給食係はもとよりその日の当番の母の会員も甲斐よく服裝を整えて、

我家の台所で鍛えられた腕前が發揮される訳

です。十時頃には各組別に正確な出席人員が報告されます。

十一時を少し過ぎる頃に、日々凡そ二百五十七十名分の食事が調い、いよいよ配膳になります。



清潔な白塗りの配膳車がベルを鳴らしつゝ廊下を進んで来るのを待受け居ます。

ランチ皿に御飯を型で抜く人、副食を盛り

合はせる人、盛付けを了えた皿を運ぶ人と淀みのない流れ作業が行はれて、その間凡そ一時間で七室の配膳を完了致します。

いよいよ待遠しかつた食事が始められるのです。眼を閉ぢて静かに待つ子供達の真剣な顔々。

最後に

本園の給食に於きましても、決して現状に満足して居ります訳ではありません。日々反省し、常に工夫を計り、不備を改善していくよりもよきものにと努力致して居ります。

食事も時折、園庭や遊戯室に於て全園児の会食を楽しむ以外、平素に各組別の保育室で使用致しますが、将来には理想的な大食堂の設置を考えて居ります。（感應幼稚園教諭）

（15頁より）

健康記録、生育史、家庭状況、校外生活の影響。そして家族中に弟妹が生れたこと、悪い家庭、病歴及び栄養失調歴、子供が学校で良い成績をあげるよう親から強制されること、家庭における無訓練、訓練過剰、ラジオの恐ろしい話及びその他の多くの条件は、子供の心の平和或はそれを欠くことに影響を与えてい

る。家庭と学校間の良い協力関係がどうして必要である。なぜならば前者或は後者が幼

児の不適応或は非行の基礎的原因にならないようである。

◇ ◇ ◇

どんな幼稚園が良い幼稚園であるかについて、種々述べてきたので、読者は、幼稚園の教育が単に子供を半日間保護すること以上のものであることを、十分理解し得たであろう。幼稚園の教師は、大きな責任をもつてゐる。教師が子供と協力する結果如何によつて、子供は幼稚園が好きにも嫌いにもなる。さらに教師の同情的な指導が行われる場合とそれを全く場合とを考えて見ると、子供の学校生活は、前者においては、良く順応した熱心な幼児として、後者においては、スタートから障害を受けた、くちけた、失敗した幼児として進んでいくのである。また教師の舵のとり方一つが、子供の学校生活に対する親の永続的関心或は無関心に刺激を与える。教師の影響は、全く多種多様である。教師は特定の事実に対する教師であるよりも、むしろ幼児のガイドであり、指導者なのである。

（完）

☆ ☆ ☆